

糟谷さんを悼む

私は1967年入学です。入学直後に京大の自衛官入学反対闘争があり、同じ年に10.8羽田闘争がありました。毎月のように大きな闘争がありました。入学というよりは、入隊と言った方がいいような年でした。

田舎から政治のせの字も知らずに出てきた若者でしたが、アメリカ軍がベトナムの民衆を虫けらのように集落と皆殺しにする「ジェノサイド」があると知らされ、世の中にこんな不条理なことがあるのかと思いました。その時すでに先輩の人たちが先駆的な理論でそこで起こっている現象が何を背景にしているのか。さらに日本政府がそこにどうかかわっているのかを分析的に分かりやすく説明してくれました。

不条理への義憤と、新鮮で深い理論への傾倒で私を含む多くの若者が立ち上がりました。帝国主義公民としての自己否定を含む覚悟の上での決起でもありました。

今振り返っても、純粹すぎる感性と、熱い情熱が私たちの体内にたぎっていた時代でした。あれから50年経てもその時代に迫る時を感じたことはありません。

69年の秋の決戦、その前夜に別れの盃を交わしたこともありました。

そんなたぎる時代に、山崎君、そして糟谷君は亡くなりました。

糟谷君の遺書となったメモに「11.13に何か佐藤訪米阻止に向けての起爆剤が必要なのだ。犠牲になれというのか。犠牲ではないのだ。それが僕が人間として生きることが可能な唯一の道なのだ」当時の多くの若者の気持ちもそうだったと思います。

この時代を糟谷君と共に生きたことを今でも誇りに思っています。

69決戦の後、あれから私は三里塚、沖縄、山谷、川崎と活動の場を変遷する中でも何か自分の人生にゆらぎがあった時は必ずと言っていいほどその時代に亡くなった同士のことを思い出してきました。命のやり取りを目的にした闘いだっただけではないと思いますが、結果として命を落とした、もしかしたら自分がそうになっていたかもしれないことに、どうしても後ろ向きになれなかった。それが自分が選んだ人生なんだと思い続けてきました。後悔しない人生。後悔してはいけない人生にいつも糟谷君がいました。

いま、私は草の根で、その当時に比べれば牧歌的で軟弱なことをしているにすぎないかもしれませんが、人が人らしく尊重される社会をめざして愚直に活動しています。

今日ここに是非とも参加させてもらおうと思ったのは、この会を主宰された岡山・日本原の内藤さんがおられたからです。内藤さんのことは1年前に紙芝居を見せてもらって知りました。農業、とりわけ酪農は大変、旅行にも行けないそんな境遇を引き受けながら反戦の意志を貫いて生きてこられた。そこに何の気負いもない。これはアフガニスタンで亡くなられた中村哲さんにも通じる尊い生き方と感銘を受けました。尊い精神と志が日常の生活や行いの中にある。そこに本当のラジカリズムがあると感じました。

家族のことを少し話します。

ぼんやり育っていたと思っていた娘たちですが3.11東日本大震災以降、家族で被災地にボランティアに行ってから、急に目覚めて反原発の運動に若手アーティストとして加わったり、反安保法制のシールズなどの輪の中に参加するようになりました。

この正月に、昔の活動記録を見せた折に、お父さんたちすごいことやったんだね。もっと発信したらいいよと励まされました。

「終活」という言葉は好きではないです。ですが、まぬがれないのも確かなことです。平和を願って戦争体験を伝えてこられた先達に見習って、反戦、全共闘のあの時代のこと、誠実に生きた若者の思いを次の世代に語り継ぐことも私たちの大切な務めかなと感じ始めました。「語り部」としての話のなかに山崎君、糟谷君のことを伝えていきたいと思っています。

最後に、「私たちにも未来があります」と言いたいです。 まだ少しは かもしれませんが。

どうか皆さん、未来への希望をもって糟谷君の分まで生きていきましょう。

当時のプロ学同委員長としての発言としてはあんまり勇ましくなくて、期待外れだったかもしれませんが、これをもって私の発言とさせていただきます。

2020年1月13日

岩木 要